



Title	『ReD』誌バウハウス特別号刊行の背景：カレル・タイゲ宛ハンネス・マイヤー書簡を手掛かりに
Author(s)	小野, 真司
Citation	フィロカリア. 2024, 41, p. 65-91
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/95655
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『Red』誌バウハウス特別号刊行の背景

カレル・タイゲ宛ハンネス・マイヤー書簡を手掛かりに

小 野 真 司

はじめに

- Ⅰ. 『Red』特別号刊行の経緯
 - Ⅰ-Ⅰ. バウハウスとデヴィエトスイル
 - Ⅰ-Ⅱ. 『Red』特別号刊行までの過程
 - Ⅱ. 『Red』特別号と「バウハウス友の会」
 - Ⅱ-Ⅰ. 言語選択をめぐる問題
 - Ⅱ-Ⅱ. ドイツ語話者に向けた媒体として
 - Ⅲ. 『Red』特別号とバウハウス組織改革の宣伝
 - Ⅲ-Ⅰ. マイヤー指揮下のバウハウス組織改革
 - Ⅲ-Ⅱ. 内向的な宣伝媒体としての『Red』特別号
 - Ⅲ-Ⅲ. バウハウスの国際性と『Red』特別号
- おわりに

はじめに

ハンネス・マイヤーは一八八九年にスイスのバーゼルに生まれた建築家・都市計画家である。スイス・ドイツで専門教育を受けた彼

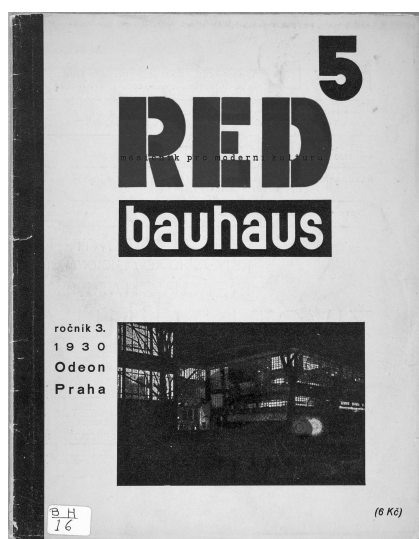
は、一九二六年からドイツ各地のジードルンクの建設に関与し、一九一九年に独立した建築家として事務所を開く。この頃の実作例に『フライドルフ・ジードルンク』（一九一九～一九二四年）がある。一九二六年にはバーゼルでハンス・ヴィトヴァー（Hans Wittwer, 1894-1962）とともに建築事務所を開き、バーゼルの《ペータースシユーレ》設計競技案（一九二六年、ヴィトヴァーと共同）やジュネーヴの《国際連盟事務局》設計競技案（一九二七年、ヴィトヴァーと共同）等を手掛けている^{1）}。

大がかりな吊り舞台を持つ《ペータースシユーレ》や、ガラスと鉄骨を多用し、摩天楼を備えた《国際連盟事務局》はそのラディカルさによって注目を集めた。バウハウスの初代校長ヴァルター・グロピウス（Walter Gropius, 1883-1969）は自身の手による著書『国際建築』（バウハウス叢書第一巻）の中で《国際連盟事務局》設計競技案の軸測投影図を掲載しており、マイヤーを同時代の先進的な建築家の

一人であると捉えていた様子がうかがえる。一九二七年四月、マイヤーはグロピウスによってバウハウスに招聘され、同校に新設された建築部門を率いることとなる。そして一九二八年四月にマイヤーはバウハウスの第二代校長に就任する。

マイヤーは一九三〇年八月、「表立って機関を政治化した」、「マルクス主義者は決してバウハウスの校長であるべきではない」として、当時のデッサウ市長フリッツ・ヘッセ (Fritz Hesse, 1881-1973) によって校長職を解かれたため、彼の校長としての任期は僅か二年四か月に留まる。しかし、その短い任期の中で、マイヤーは工房の再編成や科学的専門知識に基づく体系的建築教育の確立等の組織改革に取り組み、多分野にわたる人材を正規教員や客員講師として招聘した⁽⁵⁾。こうして招かれた客員講師の一人に、チェコスロヴァキア (当時) の芸術家・文筆家カレル・タイゲ (Karel Teige, 1900-1951) がいる。カレル・タイゲは一九〇〇年にブラハ (一九〇〇年当時はオーストリア＝ハンガリー二重君主国のボヘミア王冠領、現在のチェコ共和国) で生まれた芸術家・文筆家である。タイゲは一九一九年にカレル大学に入學したのち、一九二〇年に前衛芸術グループ「デヴィエトスイル (Devětsil)」⁽⁶⁾ を設立、一九二四年に自らの芸術理論である「ポエティスム」を提唱する。また『ディスク (Disk)』 (一九二三年)、『Red』 (一九二七―一九三二年) 等の雑誌の創刊に関与し、建築雑誌『スタヴァ (Stavba, 建設)』の編集にも携わった。一方で印刷やフォトモンタージュ、コラージュを利用したシュルレアリスムの作品も制作す

るなど多方面で活動し、両大戦間期におけるチェコスロヴァキアの前衛芸術の第一人者であった。⁽⁸⁾ マイヤーは一九二八年から一九五〇年にかけてタイゲと断続的に書簡を交わしていたほか、自身の校長時代にタイゲをバウハウスに客員講師として招いたのみならず正規の教員として雇用しようとしており、またタイゲも自らが編集した雑誌『Red』の一九三〇年第三巻第五号 (挿図1) を「バウハウス特別号」と銘打ってバウハウスを特集するなど、両者の関係は親密なものであった。『Red』は一九二七年から一九三一年までデヴィエトスイルの機関誌として、ブラハのオデオン (Odeon) 社から刊行されていた芸術雑誌である。その表題は「Revue Devětsil (デヴィエトスイルのレビュー)」の略であるが、⁽¹⁰⁾ 同時にデヴィエトスイルが共産主義



挿図1 ハンネス・マイヤー、『Red』第3巻第5号 (カレル・タイゲ編集) 表紙、1930年2月、ハーバード美術館群ブッシュ＝ライジンガー美術館 (ヨーゼフ・アルバース寄贈)、写真：© President and Fellows of Harvard College.

的傾向を有していたことから、「赤」の意味も込められていたと推測される。『Red』バウハウス特別号（以下『Red』特別号と表記）は、マイヤーがバウハウス校長を務めていた一九三〇年の二月に同誌の第三巻第五号という形で発刊された。内容としては、マイヤーによる「バウハウスと社会 (bauhaus & gesellschaft)」(チェコ語)^[11]、広告部門の教員である写真家ヴァルター・ペーターハンス (Walter Peterhans, 1897-1960) による「写真の現在の状況 (zum gegenwärtigen stand der fotografie)」(ドイツ語)、学生オットー・ベルガー (Otto Berger, 1898-1944) による「室内の生地 (stoffe im raum)」(ドイツ語)、学生アルベルト・メンツェル (Albert Mentzel/Albert Flocon, 1909-1994) による「バウハウス人から学生へ (vom bauhäusler zum studierenden)」(ドイツ語)の四本の文章が掲載されたほか、ヨーゼフ・アルバース (Josef Albers, 1888-1976)、パウル・クレー (Paul Klee, 1879-1940)、ヨースト・シムニット (Joost Schmidt, 1893-1948)、トイヤー、ペーターハンスら教師陣や、学生による作品図版・図面等が掲載された。図版の説明はチェコ語とドイツ語の両方で書かれている。

特にこの『Red』特別号については、既存の研究においてバウハウスとチェコスロヴァキアの芸術の深い関係を示すものとみなされている。メーガン・フォードブスの研究はタイゲのバウハウス招聘講演『Red』特別号の時代を、バウハウスとチェコスロヴァキアのアヴァンギャルド関係史上最高潮の時期と位置付けている。^[12] またヤネット・ファビアンは『Red』バウハウス特別号をマイヤーとタイ

ゲの共同プロジェクトの一つであるとし、そのうえで『Red』が多言語的・国際的雑誌であったこと、マイヤーの「バウハウスと社会」のチェコ語訳が掲載されたこと、バウハウス特別号の巻頭に「万国の若人よ、来たれバウハウスへ! (junge menschen aller länder kommt ans bauhaus)」の一文が書かれていることに触れ、バウハウスの国際的な性格を強調している。^[13]

これらの研究はバウハウスとチェコスロヴァキアの前衛芸術との深い関係を示す媒体として『Red』特別号を取り上げている。しかし、『Red』はチェコスロヴァキアで刊行された雑誌であるにもかかわらず、そしてバウハウス特別号以外の『Red』はチェコ語が主要言語として用いられているにもかかわらず、バウハウス特別号の本文の大部分はドイツ語で執筆されている。先行研究において、この言語選択の意図について注目したものは存在しないが、筆者は掲載された記事が主にドイツ語で書かれている点に、『Red』バウハウス特別号刊行の背景を解明する手掛かりがあると考えている。

以上の前提を踏まえ本稿は、『Red』バウハウス特別号がマイヤー指揮下で展開されたバウハウス改革の成功を、バウハウスの支持者に向けて宣伝するために企画された可能性について考察する。第一章では、グロピウス校長時代以来のバウハウスとデヴィエトスイルとの関係と、『Red』バウハウス特別号刊行までの経緯を確認する。第二章では、バウハウス特別号の使用言語を巡る問題をタイゲ宛マイヤー書簡と『Red』本誌をもとに考察し、『Red』特別号はドイツ

国内のドイツ語話者、特に「バウハウス友の会」の会員が主な読者

層として想定されていた点について指摘する。第三章では、マイヤー指揮下のバウハウスで展開された組織改革とその宣伝を概観し、

『Red』がバウハウスの支持者に向けた内向きの宣伝媒体として計画された可能性について考察する。また、以上の取り組みがチェコスロヴァキアの雑誌で展開された理由について、マイヤー指揮下のバウハウスの国際化と、バウハウスとチェコスロヴァキアの関係の強化という観点から説明を試みる。以上により、『Red』バウハウス特別号刊行の背景には、マイヤーが主導したバウハウス改革の成功が、国外の雑誌で紹介されたという証拠を、ドイツ国内の支持者に向けて示そうとしたマイヤーの意図が存在した可能性を提示する。

1. 『Red』バウハウス特別号刊行の経緯

1-1. バウハウスとデヴィエトスイル

バウハウスとデヴィエトスイルの関係は少なくとも一九二三年に遡る。ベルリンのバウハウス・アルヒーフにはグロピウスが一九二三年三月六日から一九三〇年十二月六日にかけてタイゲに宛てた書簡が十五通残っている。¹⁴ そのうち一九二六年六月二十六日付の手紙までの十二通は、グロピウスの校長在任期間中（一九一九年四月十二日から一九二八年三月三十一日）に送られたものである。書簡以外にもグロピウス指揮下のバウハウスとデヴィエトスイルとの関係は確認できる。例えば一九二三年にヴァイマルで開催されたバウハウス展

覧会ではヨゼフ・ホホル (Josef Chochol, 1880-1956)、ヤロスラフ・フラグネル (Jaroslav Fragner, 1898-1967)、カレル・ホンジーク (Karel Honzik, 1900-1966)、ヤロミール・クレイツァル (Jaromír Krejcar, 1895-1980) といったデヴィエトスイルの建築家による作品が紹介され、¹⁵ 一九二六年の段階では「バウハウス叢書」の一冊として、タイゲによる『チェコの建築』が計画されていた。¹⁶

『Red』誌においても、創刊当初からバウハウスとの関係が見出せる。一九二七年十月に発行された『Red』第一巻第一号にはバウハウスの家具・調度品の広告が掲載されており、チェコスロヴァキアでの販売の受け口として、クレイツァルの名が記されている。¹⁷ その後もバウハウスの広告は一九二八年七月に刊行された第一巻第十号まで連続で掲載されている。また、「国際建築特集」と銘打った一九二八年二月刊行の第一巻第五号にはグロピウスの『「バウハウス」の生産の原則』のチェコ語訳が掲載されている。¹⁸ この文章は「バウハウス叢書」第七巻の『バウハウス工房の新製品』巻頭に掲載されたもののチェコ語訳である。他の号でもマルセル・ブロイアー（一九二八年二月第一巻第五号一七二頁）、ゲオルク・ムッヘ（同一八三頁）、モホリ・ナジ・ラーズロー（一九二九年一月第一巻第四号一四二頁および一九二八年五月第一巻第八号二八七頁）、パウル・クレー（一九二八年九月第二巻第一号二十七頁）らバウハウスの教員の作品が掲載されている。

このようにマイヤーの校長就任以前からバウハウスとデヴィエト

スタイルの間には協力的な関係があり、『Red』においても創刊当初からバウハウス関係者の文章や作品、バウハウスの広告が掲載されていた。この観点においては、マイヤーとタイゲの関係は、グロピウス時代から存在したバウハウスとデヴィエトスタイルの関係の延長線上に位置付けられる。一方マイヤーは一九二五年から一九二七年にかけてデヴィエトスタイルの創設者の一人であるアルトゥシユ・チェルニーク (Artuš Černik, 1900-1953) と手紙を交わしており、それがタイゲとの交友の契機となったとの推測をレア・ミハロヴァーは示している。²⁰⁾しかしマイヤーとタイゲの交流を裏付ける直接的な資料として最も古いものは、筆者が確認できた限りでは一九二八年十月十七日のタイゲ宛書簡であり、マイヤーのバウハウス校長就任後のものである。それ以降、一九五〇年までに現在筆者が確認できているだけでも計三十五通の書簡がマイヤーからタイゲに送られている。中でも一九二八年十月十七日から一九三〇年九月四日に至るまでの、マイヤーのバウハウス時代から解雇直後の時期は、計三十一通の書簡が残っており、両者の交流が盛んであったことが推測できる。

このタイゲ宛マイヤー書簡には『Red』特別号刊行までの両者のやり取りが細かく記録されている。この書簡資料を使用し、どのような経緯で『Red』特別号が刊行されたのかを次節において問う。なお、以下で扱うタイゲ宛マイヤー書簡はすべてベルリンのバウハウス・アルヒーフが所蔵するものである。またタイゲからマイヤーへの書簡は現在所在が確認できていない。

1-11 『Red』特別号刊行までの過程

現在確認できているマイヤーがタイゲに宛てた書簡計三十五通のうち、『Red』特集号について最初に言及されていると考えられるのは一九二九年一月二十九日付書簡である。バウハウス・アルヒーフに所蔵されているこの書簡は、中央部が切り取られた一頁目の断片のみが現存し、書面に箇条書きされた事項のうち第一項は欠落しており、第四項も途切れている。そのため書簡全体の内容ははっきりしないが、現存している第二項に「あなたの雑誌のバウハウス特別号」との一文が記されている。

2.) 同封にて、あなたの雑誌のバウハウス特別号にとって相応しい文章をお送りします。しかし、この原稿をチェコ語に翻訳する際には文章の配置を同じままにしておくことはっきりとお願い申し上げます。簡明・簡潔な形式を維持することで、思考過程をはっきりと示すことが、私にとって非常に重要なのです。私は、あなた自身がこのチェコ語訳に可能な限りのことをしてくれと考えています。²¹⁾

この書簡ではバウハウス特別号を刊行する雑誌の名前は明記されていない。しかしタイゲが編集に関与していた雑誌のなかで、特別号という形でバウハウスが扱われた媒体は『Red』のみであるため、この雑誌とは『Red』特別号のことを指していると考えられる。マ

イヤーはこの時点で掲載を前提に何らかの文章を送付しており、少なくともこの文章についてはチェコ語への翻訳を見越したものであったことがわかる。実際に刊行された『Red』誌においてチェコ語に翻訳されたうえで掲載されているのはマイヤーの「バウハウスと社会」のみである。これはもともと一九二九年一月にバウハウスの機関紙『バウハウス』第三巻第一号に掲載されたドイツ語の文章である。⁽²²⁾ 本文の特徴として改行やインデントを多用したレイアウトが挙げられるが、この特有の文章配置は『Red』誌に掲載されたチェコ語訳においても踏襲されている。以上を踏まえると、この時点でマイヤーは「バウハウスと社会」の原稿をタイゲに送付していたと考えられる。

『Red』という誌名が初めて書簡で明記されたのは一九二九年三月十四日付書簡である。この書簡でマイヤーは「あなた「タイゲ」の訪問を機として、あなたは『Red』誌のバウハウス号のための素材を自由な選択の下で探すことができます」と綴っている。⁽²³⁾ つまりタイゲのバウハウス訪問が計画されており、その折にタイゲが『Red』特別号に使用する素材を選択する予定であることが読み取れる。素材とは、『Red』に掲載する絵画や写真等のことであろう。

一九二九年七月十一日付書簡では、マイヤーは『Red』特別号がいつ、どのように編集されるのかタイゲに尋ねている。⁽²⁴⁾ しかし一九二九年九月五日付書簡でマイヤーは以下のように述べ、当時計画されていたタイゲのバウハウス招聘が延期され、また『Red』特別号

の発行も延期される見込みであることを嘆いている様子が読み取れる。

あなたの一九二九年九月三日の詳細な手紙から、あなたがさしあたり講演のためにバウハウスへ来ないこと、そして早ければ十一月か十二月の『Red』誌で計画されていたバウハウス特集号はすぐには発行されないことを読み取りました。

こうした状況の下、あなたが切り出した質問について書簡での意見交換を全て行うことは不要であり、また私はこの秋にブラハへ行く予定なので、その間にもう一度ブラハで会うことを考えています。

もうじきあなたはバウハウスについての新たな出版物を受け取るでしょう。それは暫定的なパンフレットとして私がまとめたものです。その中にはあなたのバウハウスの出版物に大変相応しいいくつかの作品もあります。

あなたがバウハウスへ来る計画が実現しなかったのは大変惜しいことです。それゆえ私はチェコスロヴァキアへの架け橋を別の方法で築かねばなりません。⁽²⁵⁾

このように、マイヤーはタイゲのバウハウス訪問が実現しなかったことを残念に思っていると記している。一方で、『Red』の発行に向けて、ブラハでの意見交換を望んであり、加えてバウハウスにつ

いての出版物である「暫定的なパンフレット (proviserischer prospekt)」を別送していることから、『Red』特別号の計画を継続する意図が見える。この「暫定的なパンフレット」の候補として考えられるのが、一九二九年の夏季休暇中にマイヤーが制作した小冊子『若人よ、来たれバウハウスへ！ (junge menschen kommt ans bauhaus)』である。⁽²⁶⁾ 両者を比較すると、写真や図版のうち共通するのは、デッサウの校舎を空撮した写真とバウハウス劇団の公演風景、ラッシュ (Rasch) 社で生産されていたバウハウス壁紙の広告以外は見受けられない。しかし、『若人よ、来たれバウハウスへ』に一部分が掲載されていたペーターハンスの「写真の現在の状況」や、マイヤーの「バウハウスと社会」は『Red』特別号にも掲載されており、「若人よ、来たれバウハウスへ！ (junge menschen, kommt ans bauhaus)」の文言は、『Red』特別号においても「万国の若人よ、来たれバウハウスへ！ (junge menschen aller länder, kommt ans bauhaus)」と言葉を加えたうえで巻頭に掲載されているなど、共通点も多い。以上を踏まえると、一九二九年九月頃に『若人よ、来たれバウハウスへ』はタイゲのもとに送付され、それは『Red』を編集するうえで大いに参考とされたと考えられる。

その後『Red』への言及がみられるのは一九二九年十二月十八日付の書簡である。同日付の書簡は三通が確認できたが、うち一通は冒頭に「管理部門からの通知 (die leitung gibt bekannt)」との記載があり、この書簡はバウハウスから公式文書、ないしそれに近いもの

として送られたものであると推測される。

管理部門からの通知

チェコの文筆家であるカレル・タイゲ (プラハ) は、バウハウスの管理部門から一週間の招聘授業を一九三〇年の一月二十日から二十五日にかけてバウハウスで行うことを義務付けられる。その依頼は、

「現在のヨーロッパの著作、特にフランス、チェコ、ロシアの文学」

について講演し、また「広告部門」において

「新しい内容と新しい形態の間の」

「タイポグラフィにおける」

関係を説明することである。

カレル・タイゲ氏は一九三〇年二月に彼が刊行する雑誌『Red』(プラハ)においてバウハウスの新しい活動についての特別号を発行する。⁽²⁷⁾ (傍線は原文ママ)

ここで正確な招聘授業の日程とその内容に加えて、『Red』のバウハウス特集号についても示されている。バウハウスの管理部門からの通知という形で、特別号の刊行がバウハウスでの招聘授業と同列に明記されたことは、特別号の刊行はバウハウスとの契約事項になったと考えてよいだろう。

一九二九年十二月（日付は読み取れないものの、おそらく二十七日、少なくとも十五日から二十九日までの間と推測される⁽²⁸⁾）の書簡は「[Red] バウハウス特別号について」と冒頭に明記され、そのうえでバウハウスと「Red」の間で取り決めが行われた発行日、部数、ページ数等について、詳細に書かれている。

ここに私は一九二九年十二月十四日の、あなたの雑誌でのバウハウス特別号の発行に関しての取り決めを、以下の通りに確認します。

一九三〇年二月号が予約されています。最終的な素材は遅くとも一九三〇年一月二十日までにあなたの手元に届けられることになっています。テキストと図版の一部は今月中にあなたの元に届きます。

編集は署名者による監督の下で行います。

通常の発行部数は一四〇〇部です。まもなくあなたが我々に通知する追加の手当と引き換えに、我々はさらに一〇〇〇部を引き受ける用意があります。

この一〇〇〇部を我々は以下のように分配します。

五〇〇部Ⅱ「バウハウス友の会」

二〇〇部Ⅱバウハウスのメンバー

三〇〇部Ⅱ関心のある者・訪問者への分配用

通常号の頁数は三十二頁と表紙

内訳…二ページは折り込み

十六頁はオート紙（オートタイプ用）そして

十六頁はマット紙（文章と白黒のステロ版用）

表紙は場合により二色刷りも可能

表紙の費用は出版社が引き受けます。

白黒のステロ版の単価は一平方センチメートル当たり四十ヘラー「ハレーシユ」⁽²⁹⁾（約五ペニヒ）

オートタイプの単価は一平方センチメートル当たり五十ヘラー「ハレーシユ」⁽²⁹⁾（約七ペニヒ）

その間にW. ペーターハンス氏は一本の（良い）原稿とそのための写真を我々に提供し、加えてあなたもご存知のオッティ・ベルガー嬢による織物についての未発表原稿も届きます。――残りはすべて後ほど届きます⁽³⁰⁾。

一九三〇年一月六日付書簡では、マイヤーはバウハウス特別号について「全て同意します！資料はあなたが訪問することで最終的にまとめられます。可能ならば、近日中に資料の一部を送ります」と綴っており、特別号についての段取りがまとまったことがわかる。この書簡は、冒頭に一九二九年十二月二十九日のマイヤー宛タイゲ書簡に対する返信である旨が記されている。前述の通りタイゲの書簡

の内容は現時点では確認できていないが、タイゲ側から『Red』の内容に関する何らかの提案か要請があったことがわかる。マイヤーの返信の文面から、その内容は、『Red』に掲載したいと望む記事なしの写真・図版の資料を送ってほしい、という類のものではないかと推測される。加えてタイゲのデッサウ訪問に合わせてより具体的な内容の検討が行われるであろうことも読み取れる。

一九三〇年二月六日付書簡⁽³²⁾の内容は、すべてが『Red』誌の相談に割かれている。この書簡には特別号についてのマイヤーの要望が箇条書きで書かれており、その中で使用言語の選択についても細かく記されている。これについては二一一において詳しく掘り下げる。

『Red』特別号刊行前最後の書簡は一九三〇年二月十四日書簡である。ここでマイヤーは『Red』のための最後の素材として《デッサウ＝テルテン・ジードルンク》⁽³³⁾やバウハウスで製造された折りたたみ式の椅子の写真を添付している。その後、一九三〇年三月二十四日付書簡において、マイヤーは完成した『Red』特別号についての感想を綴っている。彼は集団作業で行われた《デッサウ＝テルテン・ジードルンク》の写真や、アントニン・ウルバン (Antonin Urban, 1906-1938) とアリー・シャロン (Arieh Sharon, 1900-1984) による学校計画の設計図に自分の名前が記されていたことを不満に思いながらも、「全体としてはとても共感できるもの」であると記している。⁽³⁴⁾

以上のような経緯で、およそ一年の期間をかけて完成した『Red』特別号だが、この特別号が何を目的として発行されたのかについて

は書簡では明言されていない。筆者はこの目的を解明する手がかりが、『Red』特別号の言語選択にあると考えている。第二章においては、『Red』特別号の使用言語についてのマイヤーの要求が細かく記された一九三〇年二月六日付タイゲ宛書簡を手掛かりに、この特別号に期待された役割について考察する。

一：『Red』バウハウス特別号と「バウハウス友の会」

二一・言語選択をめぐる問題

『Red』は国際性を前面に打ち出した雑誌であり、表紙やキャプションは通常チェコ語・ドイツ語・フランス語が併記されていた。しかし、バウハウス特別号以外の号の本文は主にチェコ語で書かれており、外国語で本文が書かれている場合、その多くは詩を掲載している場合であった。例えばフィリップ・スーポー (Philippe Soupault, 1897-1990) の詩のフランス語原文や、ヴィーチェスラフ・ネズヴァル (Vítězslav Nezval, 1900-1958) の詩のドイツ語訳が掲載された例がある。

バウハウス特別号以外にチェコスロヴァキア国外の動向についての特集が組まれた例として、一九二九年二月に発行された第二巻第六号のマリネッティ特集が挙げられる。この号ではフィリップ・トマゾ・マリネッティ (Filippo Tommaso Marinetti, 1876-1944) の「正確な詩 (Poema preciso)」がイタリア語で、「詩的機械 (machine litrique)」がフランス語で掲載されている。⁽³⁵⁾しかし、その後にタイゲによるチェ

コ語の記事「F. T. マリネッティ + イタリアの現代 + 世界の未来派 (F. T. Marinetti + italská moderna + světový futurismus)」が二十ページにわたって続いている⁽⁸⁾。他国の動向を取り上げた他の例としては、他に一九二七年第一巻第二号での「ソヴィエト・ロシアの文化活動十周年 (10 let kulturní práce Sovětského Ruska)」特集や一九二八年第二巻第三巻の「ギヨーム・アポリネールの遺産 (Památky Guillaume Apollinaire)」一九三〇年第三巻第八号のフランスの前衛グループ「ル・グラン・ジュ」の特集があるが、これらの本文は主にチェコ語で書かれている。

以上を踏まえてバウハウス特別号の内容を概観すると、チェコ語で本文が書かれた原稿はマイヤーの「バウハウスと社会」と編集部注記のみであり、他はすべてドイツ語で書かれている。また、図のキャプションに関しても、他の号で通常併記されているチェコ語・フランス語・ドイツ語の三言語ではなく、チェコ語とドイツ語の二言語となっており、本号はドイツ語を主要な言語として用いているという点⁽⁹⁾、【Red】の他の号と比べて異質である。

この通常の【Red】とは異なるバウハウス特別号の言語選択に、本特別号刊行の意図があると考えられる。意図を知る手掛かりとなるのが以下に引用した一九三〇年二月六日のタイゲ宛マイヤー書簡である。マイヤーはこの書簡にて【Red】特集号についての要望を簡条書きの形でタイゲに示している。

1) 文章…あなたはこれまでにオッティ・ベルガーによる壁紙部門についての原稿のみを受け取っています。—あなたは同封したベーター・ハンスの原稿「写真の現在の状況」を受け取ります。もしこの原稿をドイツ語で掲載できるなら、バウハウス友の会の興味にとって好ましいように思われます。

学生の代表者であるアルベルト・メンツェルは、バウハウス週間の間に「バウハウス人について」という講演を行いました。彼は、私の指示に基づいてこれを集中的に改稿しました。その原稿はあなたがデッサウで起草した原稿に類似した対比を含んでいるため、【Red】への掲載にふさわしいと私は考えています。また私の判断ではメンツェルの原稿はドイツ語で、あなたの原稿はチェコ語で印刷されるべき、またはその逆にすべきです。もしあなたが一人の学生の見解に耳を傾けてくれるなら、友の会の会員にとって有益であると思います。

さらなる寄稿文として、私の論文「バウハウスと社会」をチェコ語に翻訳する計画をあなたはお持ちでした。この判断については、喜んであなたに委ねます。

2) 通知欄…質問…友の会のために、通知欄にお知らせを確実に入れてもらうことはできますか？またこの機関の最新の声明（展覧会、講演など）について言及していただけたら嬉しいです。ただしどちらも単なるお願いであり、必須のことではありません。

3) 付録写真面…私はつい最近素材の整理を行ったので、あなたは製版のための最初の発送物を明日にでも受け取ります。

残りは二日間のうちに続けて届きます。

4) 質問…封筒のための下図はこちら側で作るべきでしょうか、それともあなた個人でしていただけるのでしょうか？

最大の挨拶を込めて

ハンネス・マイヤー

同封物…ペーター・ハンスの原稿^②

1) では、『Red』に寄稿する文章の言語選択について細かな注文が付けられている。マイヤーはペーター・ハンスの原稿「写真の現在の状況」をドイツ語で掲載し、アルベルト・メンツェルの原稿とタイゲの原稿の片方をドイツ語、もう一方をチェコ語で刊行するよう要望している。さらに、タイゲはマイヤーが執筆した「バウハウスと社会」をチェコ語に翻訳して掲載したいと以前から望んでいたことが明かされており、マイヤーはこの掲載に關しての判断をタイゲに任せるとしている。

実際の『Red』バウハウス特別号に掲載された記事を概観すると、マイヤーの「バウハウスと社会」がチェコ語、ペーター・ハンスの「写真の現在の状況」、ベルガーの「室内の生地」、メンツェルの「バウハウス人から学生へ」がドイツ語で掲載されている。一方で書簡に記載のある、タイゲがデッサウで起草した原稿については『Red』

には掲載されていない。この原稿とは、文章の最後に「一九三〇年一月デッサウ」との記述のある「バウハウスの十年 (Das 10te Bauhaus)」のことであると考えられる。タイゲは一九三〇年一月二十五日から三十日までの間バウハウスで特別授業を行っており、「バウハウスの十年」はこの間に執筆されたとみてよいだろう。「バウハウスの十年」は一九三〇年四月、タイゲが編集に關与していたチェコスロヴァキアの建築雑誌『スタヴバ』第十号にチェコ語で掲載されている。そのため「一方をドイツ語、もう一方をチェコ語で発表する」というマイヤーの希望は、媒体は違えども実現したと言える。以上のように、『Red』バウハウス特別号は、マイヤーの要望に沿う形での言語選択が行われた。

一方で、実際に発刊された『Red』特別号の巻末には、この言語選択についてマイヤーの書簡とは別の説明がチェコ語で付されている。

編集部注記…現代的創造のためのデッサウの単科大学「バウハウス」に捧げられたこの号に關しては、この三十二ページに掲載できるよりも多くの図や文章の素材が用意された。スペース不足のため、W. ペーター・ハンスとフリッツ・クルの数枚の写真、アルフレート・アルントの家具の写真、パウル・クレーとL. ファイニングの絵画、L. ヒルベルザイマーの建築プロジェクト等を、我々は次の号のいずれかにまで延期せざるを

得なかった。またスペース不足のため、編集部のために書かれた寄稿文のオリジナルであるこの号の記事に、チェコ語の翻訳は付記できなかった。しかしチェコ語訳を次号以降に付け加えるつもりである。この号のすべての挿図（五枚を除く）はこれまでもどこにも発表されておらず、複製と翻訳の権利は編集部とパウハウスに留保される。⁴⁰

つまりスペースが不足したためにチェコ語の翻訳を掲載できなかったと説明しているのだが、これはチェコ語訳を省略してでもドイツ語のオリジナル原稿を掲載する必要があったことを示していると言える。また、パウハウス特別号より後の『Red』誌を参照しても原稿のチェコ語訳は掲載されていない。前出の二月六日の書簡の内容から推測すると、パウハウス特別号に掲載された論文の多くがドイツ語であった理由は、マイヤーによる要望の結果であると思われるが妥当であろう。

では、なぜマイヤーは自身の論文以外をドイツ語で掲載することを望んだのだろう。次項では、このマイヤーの言語選択の理由について考察する。

二―二. ドイツ語話者に向けた媒体として

マイヤーは言語選択の理由について「パウハウス友の会」の興味のため、と述べ、通知欄にも「パウハウス友の会」のためにパウハ

ウスの紹介を入れてほしいと綴っている。

「パウハウス友の会」についての言及は、他の書簡においても散見される。一―二において取り上げた一九二九年十二月前出書簡で、マイヤーは『Red』の通常の発行部数（二四〇〇部）に加えて追加で一〇〇〇部を引き受ける用意があると綴っている。この内訳は五〇〇部がパウハウス友の会向け、二〇〇部がパウハウスのメンバー向け、三〇〇部が関心のある者・訪問者への分配用であり、追加の発行分のうち半数がパウハウス友の会に向けて用意されたものであった。仮に計画通り二四〇〇部すべてが発行されたとすれば、パウハウス友の会のための発行分は全体の二割以上を占めることとなる。

また、一九三〇年二月十四日付書簡においてマイヤーは、この一〇〇〇部の追加分について、『友の会』の間でお金を用意するために、一〇〇〇部のパウハウス号の最終的な条件を公表していただけません。友の会のための特別な封筒は必要ありません。我々があなたに住所の資料を送付しブラハから発送することを考えています。それとも、デッサウから我々自ら行うことをご希望でしょうか」と記しており、⁴¹『Red』特別号が「友の会」に向けて発送される準備が行われていることがわかる。

ここで言及されている「パウハウス友の会」ないし「友の会」とは、パウハウスを経済的に支援するために、グロピウスが一九二四年に設立した組織である。同会はマイヤー時代も存続しており、一九二九年に発行されたパウハウス機関誌『パウハウス』第三巻第二

号を参照すると、その理事会会員にはヘンドリック・ペトルス・ベルラーヘ（建築家）、ペーター・ベーレンス（建築家）、アドルフ・ブツシュ（ヴァイオリニスト）、マルク・シャガール（画家）、ハンス・ドリーシュ（生物学者・哲学者）、アルベルト・アインシュタイン（物理学者）、ヘルベルト・オイレンベルク（劇作家・小説家）、エトヴィン・フィッシャー（ピアニスト）、ヴァルター・グロピウス（建築家・バウハウス前校長）、ゲルハルト・ハプトマン（劇作家・小説家）、ユリウス・ホフマン（建築家）、オスカー・ココシユカ（画家）、ヴィルヘルム・オストヴァルト（科学者）、ハンス・ペルツイヒ（建築家）、アルノルト・シェーンベルク（作曲家）、アドルフ・ゾンマーフェルト（建築家）、ユゼフ・ストシゴフスキ（美術史家）、フランツ・ヴェルフェル（劇作家・小説家）が名を連ねている。⁴²年会費は一九二九年時点で十マルク、永久会員になるには一〇〇マルクの支払いが必要であり、特典として年四号の『バウハウス』誌の購読権や、と友の会の催しでの割引を受けることができた。⁴³上記十八人の理事会会員のうち、ベルラーヘとシャガールを除く十六人がドイツ語話者である点を考慮すると、マイヤーの言語選択は「バウハウス友の会」をはじめとするドイツ語話者を念頭に置いた可能性が高い。そして「バウハウス友の会」について言及した三通の手紙は、『Red』特別号が「バウハウス友の会」を意識して構成されていることを示唆している。

なお『Red』特別号掲載の文章のうち、マイヤーの「バウハウスと社会」だけはチェコ語で掲載されているが、この論文は『Red』

特別号に先立つ一九二九年一月にドイツ語で『バウハウス』第三巻第一号に掲載されており、『バウハウス』の購読者であった「バウハウス友の会」会員に対してはドイツ語で発表する理由がなかったものと考えられる。

また当時のチェコスロヴァキアにはチェコ語およびスロヴァキア語話者の他、ドイツ語が母語であるドイツ系・ユダヤ系の住民も多く居住していた。一九二一年の人口調査によれば、ドイツ系の住民はチェコスロヴァキアの人口全体の二十三・六%を占めていた。⁴⁵また、知識階級・中上流階級を中心に、ドイツ語の読み書きができるチェコ系・スロヴァキア系・ハンガリー系等の住民も多かったと考えられ、その意味では多くの文章がドイツ語で掲載された『Red』バウハウス特別号は、チェコスロヴァキア向けの媒体としても機能したと推察される。しかし、マイヤーの書簡資料から推測するに、本号は「バウハウス友の会」の会員をはじめとしたドイツ国内のドイツ語話者を第一のターゲットとし、そのためにドイツ語主体の言語選択がなされたと考えられる。

それではなぜ、マイヤーはわざわざドイツ国外の雑誌を用いて、ドイツ語話者のバウハウス支持者に向けた発信を行ったのだろうか。続く第三章において、『Red』特別号が企画された背景にはマイヤーが行ったバウハウス改革があり、『Red』特別号はバウハウス改革の内向きの宣伝という役割を担っていたとされた可能性について検討する。

三『Red』特別号とバウハウス組織改革の宣伝

三―一・マイヤー指揮下のバウハウス組織改革

マイヤーはグロピウス時代のバウハウスに対して批判的であった。一九二七年四月十七日、当時バウハウスで教鞭を執っていたオスカー・シュレンマー (Oskar Schlemmer, 1888-1943) が画家のオットー・マイヤー＝アムデン (Otto Meyer-Amden, 1885-1933) に宛てた手紙によれば、マイヤーはバウハウスについて、「工芸的に過ぎる」、「ドルナツハ的である」、「装飾的な美意識」などの批判的な評価をしていた⁽⁴⁶⁾。このように、グロピウス時代のバウハウスの建築やデザインを過度に美学的であるとして批判していたマイヤーは、校長就任後バウハウスの組織改革に着手し、工房の再編成や科学的分析と専門知識に基づく建築教育の確立を試みた。予備教育はクレー、カレンディンスキー、アルバース、シュレンマーらを中心とする教育に、工房教育は織物部門・広告部門・内装部門・建築部門に再編された⁽⁴⁷⁾。再編された工房では「可能な限りの経済性」、「各部門の自主管理」、「生産的教育」の三つが主要な指針とされ、この指針の下、内装部門では、安価な合板を多用した折り畳み可能な家具に代表される、経済性と機能性を重視した家具の生産が行われた⁽⁴⁸⁾。

こうした教育プログラムの改革と同時に、バウハウスの経済的基盤も強化された。内装部門によって生み出された「バウハウス壁紙」はハノーファーのラッシュ (Rasch) 社でライセンス生産が行われ、

バウハウスにおけるもっとも重要な収入源となった⁽⁴⁹⁾。また織物部門もベルリンの繊維会社ポリテクス (Polytex) 社とライセンス契約を結んだ⁽⁵⁰⁾。広告部門はライセンス契約を締結した会社の広告やディスプレイを手掛けたり、各種展示会の注文を受けたりすることでバウハウスの生産的収入のために活動した⁽⁵¹⁾。こうした改革の結果、バウハウスの年間生産高はマイヤーの校長時代に約二倍となり、利益の面でも最も繁栄した時期となった⁽⁵²⁾。

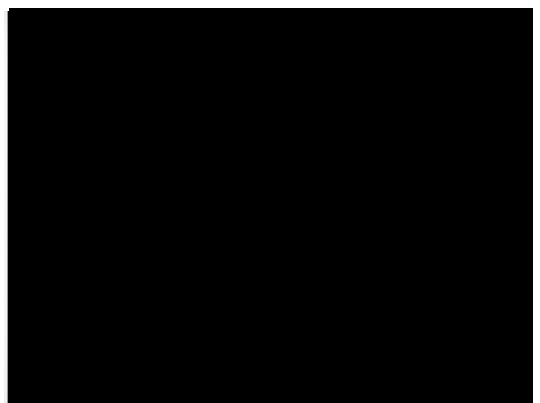
三―二・内向的な宣伝媒体としての『Red』特別号

以上のようなバウハウス改革をマイヤーは積極的に宣伝した。その取り組みの一つがバウハウス移動展覧会「バウハウスの十年」展 (Die Wanderausstellung 10 Jahre Bauhaus) の実施である。この展覧会は、一九二九年から一九三〇年にかけて、バーゼル、プレスラウ (現在のポーランド・ウロツワフ)、デッサウ、エッセン、マンハイム、チューリヒ (以上開催順) を巡った展覧会である。展覧会の内容は、「バウハウスの十年」という名前に反して、バウハウスが十年の間に生み出した成果の紹介ではなく、マイヤー時代の生産物や教育の紹介に割かれていた。つまりこの展覧会はマイヤーの指揮下のバウハウスの業績を紹介する展覧会であった⁽⁵³⁾。

本展覧会の展示内容を示すものとして、バーゼル (挿図2、3)、マンハイム、チューリヒでの展示風景を収めた写真が残っている。これらの写真には織物、壁紙、家具、金属製品といったバウハウス製



挿図3 パーゼル工芸博物館「バウハウス・デッサウ」展：シュレンマー、カンディンスキー、クレーの教育活動の展示、1929年4月21日～1929年5月20日、写真：バウハウス・アルヒーフ（Inv. Nr. 10386/1）。



挿図2 パーゼル工芸博物館「バウハウス・デッサウ」展：織物と家具（ヨーゼフ・アルパースによる折りたたみ机《ti 244》を含む）の展示、1929年4月21日～1929年5月20日、写真：バウハウス・アルヒーフ（Inv. Nr. 10386/5）。

品を展示する様子（挿図2）やバウハウスで行われている教育内容を紹介するパネル（挿図3）が収められている。バウハウスにおける生産の強化と教育プログラムの再編はいずれもマイヤー校長時代に行われた改革であり、この展示風景は、本展覧会が、マイヤーの手によるバウハウスの改革を宣伝する手段として行われたことを端的に示している。

また、パーゼルとチューリヒの展覧会はカタログが現存するが、このカタログに掲載された文章からも「マイヤーの手によるバウハウス改革の成功」を印象付けるための展覧会という性格が読み取れる。パーゼル展のカタログに掲載されたカーライ・エルネー（エルンスト・カーライ、Kallai Ernő/Ernst Kallai, 1890-1954）による紹介文では、グロピウス時代のバウハウスをある程度評価しつつも、一方で美学性への偏向についても言及されている。そしてグロピウス時代に一部示されていた合理性への方向付けがマイヤーによってより強化・徹底されたことを謳っている。また、文章の最後を「産業技術と、その優れた材料の美学的可能性は幻惑的で豪華である。しかしバウハウスは手工業的な方式であれ機械的な方式であれ、贅沢さではなく幅広い民衆の共同体の必要性に奉仕するものになった」と締めくくる。⁵⁴これは「贅沢品の需要ではなく民衆の需要」というマイヤーの姿勢に呼応したものである。⁵⁵一方、チューリヒ展のカタログにはスイスの芸術理論家ゲオルク・シュミット（Georg Schmidt, 1896-1965）の紹介文が掲載されている。シュミットは「決定的なのは、こんなに

ちバウハウスが目指している目的である。しかし、この目的は『様式の克服』という常套句では正確に表し得ない。ただ、徹底的にこう言うことだけ是可以。即ち、目的は『様式を失うこと』などである！「中略」単純かつ率直に言えば、現実に向き合うことがバウハウスなのである」と述べ、現在バウハウスが様式化に抗い、合理性・実用性の重視に舵を切っていることを強調している。

以上のように、この展覧会は現在バウハウスで取り組まれている教育内容や製品に焦点を当てたものになっていることがわかる。またバーゼル展のカatalogに掲載されたカールイの文章は美学的性が強調されたグロピウス時代から合理的なマイヤー指揮下のバウハウスへの転換を強調したものであり、マイヤーの建築や造形、教育への思想を広報する目的で展覧会が企画されたことを裏付けている。チューリヒ展のカatalogにおけるシュミットの文章も、様式の放棄と実用性への転換を示しており、これはカールイの文章と同様の流れを汲んでいるといえる。

バウハウス移動展覧会と同様に、グロピウス時代からの転換とマイヤー時代の改革を謳った文章として、二一で取り上げたタイゲによる「バウハウスの十年」が挙げられる。「バウハウスの十年」は、バウハウス移動展覧会の内容を中心にマイヤー指揮下のバウハウスを紹介する文章である。タイゲはバウハウスの十年を「中欧におけるモダン・ムーヴメントの歴史」と称して、一九一九年のバウハウス開設から一九三〇年現在までの経緯を語っている。タイゲは、開

設当初のバウハウスはいまだユーゲントシュティルと美術工芸の影響下にあり、また表現主義とシュプレマティズム・構成主義、新造形主義の十字路であったと表現する。その後、一九二三年の「ヴァイマルの国立バウハウス」展以降を「形式的装飾性の時代」とし、日用品の形態自体が「芸術」となったと述べている。そしてより機能主義的な方向へと進路を取り、「生物学的」手法を取り入れたマイヤー指揮下のバウハウスを高く評価する⁽⁵⁷⁾。

マイヤーは先に引用した一九三〇年二月六日付けのタイゲ宛書簡において、タイゲがデッサウで起草した原稿はメンツェルが執筆した原稿と類似した対比が含まれると書いている。タイゲが起草した原稿の明確な表題は書簡内で示されていないものの、二一で詳しく述べたように、この原稿とは「バウハウスの十年」を指すと考えてよいだろう。一方、メンツェルの原稿は『Red』特別号に掲載された「バウハウス人から学生へ」を指す。実際に、タイゲの「バウハウスの十年」とメンツェルの「バウハウス人から学生へ」を比較すると、マイヤーが書簡で綴っているように、類似点が認められる。メンツェルの「バウハウス人から学生へ」では、バウハウスは抽象芸術やダダ、表現主義、神秘主義の「コンテグロマリット」が基礎にあった初期段階から「円は青、正方形は赤、三角形は黄色」といったドグマが支配していた時代を経て、はじめて教育機関となったという流れを述べ、最後に現在のバウハウスの状況を説明して終わる、という形をとっている⁽⁵⁸⁾。これをタイゲの「バウハウスの十年」と比

較すると、諸芸術が混交する時代から機能主義への転向を経て、マイヤーの時代に至る、という大まかな流れと、グロピウスの時代からの転換を強調している点で類似していることがわかる。

『Red』特別号に掲載されたその他の文章も、人物の選択や内容から、マイヤーが主導したバウハウス改革の内容に沿った選択がなされていることがわかる。『写真の現在の状況』を執筆したベーターハンスは、マイヤーがほかの工房以上に注力していた広告部門の教員として一九二九年に招聘した写真家である。また当時バウハウスの織物部門の学生であったオットー・ベルガーは、『Red』特別号掲載の「室内の生地」において、「我々は生地における色彩と素材、色彩と構造の間の関係を研究し、これらの生地のための手段がもたらす可能性が無限大であることを確認する」と記している。マグダレーナ・ドロステは、「室内の生地」から分析を重視し美学や芸術という言葉を避けている姿勢を読み取っている。また、一九二八年の『バウハウス』誌二／三号に掲載された学生インタビューで「伝統的な『芸術』と新しい意味での『造形』の間の違いをあなたはどこに見出しますか」と問われたベルガーは、「伝統的な芸術や新しい意味での造形は存在しません。なぜなら、『伝統的なもの』は決して芸術ではないからです。『中略』芸術家になるためには絵画を描く必要はありません。『中略』芸術家になるためには、芸術家であらねばなりません。またすでに芸術家である者が芸術家になるためにはバウハウスに来なければなりません。そしてこの『芸術家』を再び一人の人

間に戻すこと、それがバウハウスの使命なのです」と答えた。こうしたベルガーの分析の見解や芸術へのラディカルな態度は、科学的分析を重視し「すべての芸術は秩序である」と述べたマイヤーの姿勢と相似するものである。

さらに一九二九年十二月十八日のタイゲ宛書簡において、マイヤーは「カレル・タイゲ氏は一九三〇年二月に彼が刊行する雑誌『Red』（トラハ）においてバウハウスの新しい活動についての特集号を発行する」としている。⁶⁴ ここで注目されるのは、『Red』で組まれる特集の内容が、単に「バウハウスについて」ではなく、「バウハウスの新しい活動」であると明記されている点である。これは『Red』がマイヤー指揮下で刷新されたバウハウスの紹介を行う媒体として準備されていたことの証左である。

以上から、『Red』バウハウス特別号は、「バウハウスの十年」展と同様のマイヤー指揮下で行われた改革を宣伝するための構成とられており、それは美学性が強調されていたグロピウス時代から科学的かつ機能主義的なマイヤー時代への転換を印象付けるものであった。そして、「バウハウスの十年」展が主に対外的な宣伝として行われていたとすれば、『Red』特別号は「バウハウス友の会」会員に向けた、いわば内向的な宣伝媒体としての役割が期待されたのである。

三―三. バウハウスの国際性と『Red』特別号

バウハウス改革の内向きの宣伝がチェコスロヴァキアの雑誌で行われた理由には、マイヤーの国際性志向とバウハウス自体の国際性があると考えられる。一九二六年にスイスの雑誌『ダス・ヴェルク (Das Werk)』に掲載された論文「新世界 (Die neue Welt)」において、マイヤーは「我々の住居はこれまで以上に移動可能になっている。集合賃貸住宅、寝台車、居住用ヨット、大西洋横断は、『故郷』という局地的な概念を侵食している。祖国は崩壊する。我々はエスペラントを学ぶ。我々は世界市民となる」と述べ、コスモポリタンの思想を表明している。マイヤーのこうした国際性志向はバウハウス時代にも継続してみられる。例えば一九二九年にマイヤーが作成した小冊子『若人よ、来たれバウハウスへ!』の「我々バウハウス人」と題したページでは以下のような紹介がみられる。

一四〇人がドイツ出身
八人がアンハルトから
七十八人がプロイセンから
二十六人がザクセンから
二十八人が他のドイツの州から
三十人が外国から
八人がスイス人
四人がポーランド人

三人がチェコ人
三人がロシア人
二人がアメリカ人
二人がリトアニア人
二人がハンガリー人
一人がオーストリア人
一人がオランダ人
一人がトルコ人
一人がベルシヤ人
一人がパレスチナ人
一人が国籍喪失者「後略」⁽⁶⁶⁾

人数比を考えると大半がドイツ人ではあるものの、それでも様々な国籍の学生が在籍している様子をあえて前面に出している。またタイゲの「バウハウスの十年」の中にも「こんにちでは多くの異なる国から来た二〇〇人以上の学生がここ(バウハウス)で活動している。『中略』バウハウスは少しでも多くの外国人学生を引き付けるために努力している。学生の三分の一が外国人である(七人のチェコスロヴァキアを含む)。バウハウスは真のバビロン、コスモポリスになる」との記述がみられる。⁽⁶⁷⁾ フォルケ・デイチュはバウハウスに在籍した学生の数、性別、国籍、入学前の経歴、卒業後の進路について統計的調査を行っている。⁽⁶⁸⁾ これによれば、学生数全体における外

国人学生の占める割合は、一九一九年夏学期から一九二七／一九二八年冬学期までのグロピウス校長時代は最高でも十九・一パーセントだった。しかしマイヤー校長時代（一九二八年夏学期から一九三〇年夏学期）は、一九二八年夏学期は二十三・七パーセント（二七三人中四十一人）、一九二八／一九二九年冬学期は二十六・一パーセント（二七六人中四十六人）、一九二九年夏学期は十九・一パーセント（二七三人中三十三人）、一九二九／一九三〇年冬学期は二十四・四パーセント（二〇一人中四十九人）、一九三〇年夏学期は二十三・四パーセント（一八八人中四十四人）であり、全体としてグロピウス時代よりも高い割合であると言える。グロピウス時代からマイヤー時代を経てミース・ファン・デル・ローエ時代に至るまで、バウハウスの外国人学生の割合は増加傾向にあったが、中でも割合にして約二割、数にして三十人以上の外国人学生が常に在籍していたマイヤー時代のバウハウスは、国際色の強い機関であるとアピールする根拠があったと言える。

また当時のバウハウスにとって、特にチェコスロヴァキアとの関係は無視できないものであったと考える。デー・チュの調査によれば一九一九年から一九三三年までのバウハウスにおけるチェコスロヴァキア出身学生の総数は二十二二人であり、これは諸外国の中ではスイス（三十八人）、オーストリア（二十八人）に次ぎ、ハンガリーと並ぶ数である。⁷⁰ マルケータ・スヴォボドヴァーの著書⁷¹を参照し、バウハウスで学んだチェコスロヴァキア国籍の学生をリストアップす

ると、二十一人の個人名が特定できたが、⁷² その中でマイヤー校長時代に在籍した学生は十一人に及ぶ。⁷³ さらに、機関誌『バウハウス』には一九二九年の第三巻第一号から第三巻第四号まで、巻頭の目次の下にチェコスロヴァキアにおけるバウハウス製品販売の受け口としてクレイツァルの連絡先と、『Red』誌の広告が入るようになり、バウハウスとチェコスロヴァキアの関係が強化されていることをうかがわせる。

こうしたマイヤー指揮下のバウハウスとチェコスロヴァキアの関係は、一九三〇年八月のマイヤー解雇時にチェコスロヴァキアの新聞で言及されている。同年八月三日付のプラハのドイツ語新聞『プラーク日報 (Prager Tagblatt)』⁷⁴の記事では、「彼〔訳注：マイヤー〕の二年半の在任期間中にさまざまなチェコスロヴァキアとの関係も結ばれた。バウハウスにおけるチェコスロヴァキア人（ドイツおよびチェコスロヴァキア国籍の）学生数の絶え間ない増加はその顕著な表れである」と書かれている。同じ内容の記事は同日付のドイツ語新聞『プラーク新聞 (Prager Presse)』にも掲載された⁷⁵はか、プラハのチェコ語新聞『チェコスロヴァキア共和国 (Československá republika)』も、八月八日付の紙面で「彼がバウハウスの校長であった二年半の間に、不利な条件にもかかわらず、バウハウスは発展し、彼はさまざまなチェコスロヴァキアとの関係を構築し（例えば、カレル・タイゲをバウハウスの教員に任命した）、バウハウスで学ぶチェコ人学生の数は大きく増加した。〔中略〕チェコスロヴァキアにとって、ハンネ

ス・マイヤーがバウハウスから去ったことは損失である。なぜなら、『チェコスロヴァキアに誓って』どこにいても我が国の素晴らしい将来への信念を強調した、この芸術的に際立った場所における偉大な友人であり支持者を、我々は失ったからである」と、マイヤーをバウハウスとチェコスロヴァキアの関係強化に貢献した人物として評価している。むしろこれらの新聞の政治的立場には留意する必要はあるが、複数の媒体でマイヤーとチェコスロヴァキアの関係が強調されていることは、両者の関係が重要なものであったことの傍証となる。

以上のように、『Red』がバウハウスの内向きの宣伝に利用された背景にはマイヤー自身の国際的性格、マイヤー指揮下のバウハウス自体の国際性、強化されつつあったチェコスロヴァキアとの関係といった要因があったと考えられる。そして自身が推進するバウハウスでの改革が、ドイツ国外の雑誌で大きく取り上げられたと示すことで、マイヤーは改革の成功をドイツ国内、特に「バウハウス友の会」の会員や理事・会員に対して印象付けようとしたと考えられる。第二章で述べた通り、「バウハウス友の会」はバウハウスの経済的援助を目的とする団体であった。自らが主導するバウハウスでの新しい取り組みが、国外の雑誌で大きく紹介されたという実績を支援者たる「バウハウス友の会」に向けて示すことは、バウハウスの経済的基盤の強化を進めていたマイヤーにとって不可欠なことだったのではないだろうか。

おわりに

『Red』バウハウス特別号刊行の背景には、「バウハウス友の会」をはじめとするドイツ語話者の支持者に対して、バウハウス改革が国外の雑誌で紹介されたという証拠を提示することで、彼らの支持を取り付けようとするマイヤーの意図があったと考えられる。その意味では、マイヤーの下で強化されたバウハウスとチェコスロヴァキアの関係は、バウハウスの国際化の一環というよりは、単なる内向きの宣伝手段に終わってしまったと見なすこともできる。

しかしマイヤーの国際的な性格はむしろ、バウハウス解雇後に顕著に示されることとなる。一九三〇年八月、バウハウスを解雇されたマイヤーはモスクワからの招聘に応じて一九三六年まで高等建設・建築学院(VASU)の教授や国立都市建設研究所(GHROGOR)の顧問等を務め、ソヴィエト連邦で建築、都市計画、教育を行った。またソヴィエトでの活動と並行して、マイヤーは西欧・中欧への講演旅行に赴いており、一九三一年にドイツ、スイス、デンマーク、チェコスロヴァキアで、一九三二年から一九三三年にかけてドイツ、スイス、デンマーク、スウェーデン、ノルウェーで講演を行っている⁽⁸⁾。一九三六年から一九三九年までは主にジュネーヴで都市計画に従事し、その後一九三九年にメキシコに渡り、都市計画家として活動したのち、一九四九年にスイスのクロチフィツ・デイ・サヴォサに定住、一九五四年その地で生涯を終えた。このように、離独後のマ

イヤーはソヴィエト連邦、スイス、メキシコを中心として国際的な活動を行っていた。また、一九三一年および一九三六年に講演のためにチェコスロヴァキアを訪問するなどパウハウス解雇後もチェコスロヴァキアとの関係は継続され、タイゲの死の前年にあたる一九五〇年まで書簡のやり取りも続いている。このように、『Red』特別号自体はドイツ国内向けの宣伝としての役割が大きかったとしても、その過程で形成されたタイゲおよびチェコスロヴァキアとの関係は、パウハウス解雇後のマイヤーが国境を越えた活動を展開する基盤となった。以上の観点から、『Red』特別号は、パウハウス校長時代のマイヤーの重要な業績の一つであったのみならず、離独後にマイヤーが行った国際的な活動の出発点としても大きな意義のある媒体であった。

- (1) ハンネスの経歴はKLEINERÜSCHKAMP, Werner (Hg.) *Hannes Meyer 1889-1954 Architekt, Urbanist, Lehrer*, Berlin: Wilhelm Ernst & Sohn Verlag für Architektur und technische Wissenschaften, 1989, S. 355-362. 以下WINKLER, Klaus-Jürgen, *Der Architekt Hannes Meyer: Anschauungen und Werk*, Berlin: VEB Verlag für Bauwesen, 1989, S. 223-224. WINGLER, Hans M., *Das Bauhaus, 1919-1933 Weimar Dessau Berlin und die nachfolge in Chicago seit 1937*, Köln: Verlag Gebr. Rasch & Co. und M. DuMont Schauberg, 1978, S. 409. を参照した。
- (2) GROPIUS, Walter, *Internationale Architektur (Bauhausbücher 1)*, München: Albert Langen Verlag, 1925 (Zweite Auflage 1927), S. 23.
- (3) MEYER, Hannes, „Mein Hinauswurf aus dem Bauhaus“, *Das*

- Tagebuch*, Heft 33, 1930, S.1308.
- (4) 利光功『パウハウス 歴史と理念』美術出版社（東京）、一九七〇年一六三—一六六頁。
- (5) MEYER, Op. cit. S.1308.
- (6) チェコ語で「九つの力」ないし路の一種を指す。
- (7) 同誌は媒体によって『Red』および『RED』の表記揺れがみられる。同誌が『Revue Devětsil』の略称であることを鑑みて、本論文における表記は『Red』に統一する。
- (8) ハンネスの経歴はDAČEVA, Rumjana, “Chronological overview: dates, events, publications, manifestos, and books (Translated by DLUHOSCH, Eric),” in DLUHOSCH, Eric, ŠVAÁCHA, Rostislav (edit), *Karel Teige/1900-1951: L'enfant terrible of the czech modernist avant-garde*, Cambridge (Massachusetts): The MIT Press, 1999, pp. 348-382. 以下同部賢一『カレル・タイゲ ホンネーの探究者』水声社（東京）、二〇一七年、三一九—三二六頁を参考にした。
- (9) MEYER, Korrespondenz Hannes Meyer-Karel Teige, 31. Okt. 1929, Bauhaus-Archiv Berlin, Inv. Nr. 780656.
- (10) BZDŽOVSKÁ, Lenka, “The Anant-garde ideal of poisis: Poetism and artificialism during the late 1920s (Translated by VOČADLO, Karolína),” in DLUHOSCH, ŠVAÁCHA (edit), *Op. cit.*, p.48.
- (11) 機関紙『バウハウス』第三卷第一号（一九二九年）に掲載された „bauhaus und gesellschaft“ (バウハウスと社会) のチェコ語訳。記号ヤロスラヴァ・ヴァーシラヴァ・ヤークロヴァ (Jaroslava Václavková, 1905-1978) による。
- (12) FORBES, Meghan, “To reach over the border’ An International Conversation between the Bauhaus and Devětsil,” in *Umění*, 3-4, LXIV, 2016, p. 300.
- (13) FABIAN, Jeanette, „Der tchechische Funktionalismus,” in FLIERL, Thomas, OSWALT Philipp (Hg.) *Hannes Meyer und das Bauhaus: Im Streit der Deutungen*, Leipzig: Spector Books, 2018, S. 331-333.

- (17) GROPIUS, Walter. Korrespondenz Walter Gropius-Karel Teige. Bauhaus-Archiv Berlin, Inv. Nr. 658299.
- (18) HAIN Simone. „Bauhaus und tschechische architektonische Avantgarde.“ *Wissenschaftliche Zeitschrift der Hochschule für Architektur und Bauwesen Weimar*. 26. Jahrgang, Heft 4/5, 1979, S. 414.
- (19) FORBES, Meghan. *Op. cit.*, pp. 295-296.
- (17) „BAUHAUS v Dessavě.“ *Red*. 1. Ročník, Číslo 1, 1927, s. 22.
- (18) GROPIUS, „základy práce bauhausu.“ *Red*. 1. Ročník, Číslo 5, 1928, s. 183-186.
- (19) GROPIUS, Walter. MOHOLY-NAGY, László. *Neue Arbeiten der Bauhauswerkstätten*. München: Albert Langen Verlag, 1925, S. 5-8.
- (20) MICHALOVÁ, Rea. *Karel Teige ; Captain of the Avant-Garde*. Prague: KANT, 2018, p. 347.
- (13) „2) beilegend erhalten sie eine abschrift des gewünschten aufsatze für das bauhaus-sonderheft ihrer zeitschrift. ausdrücklich möchte ich sie aber bitten, dieses manuskript bei der uebersetzung ins tschechische in der satzanordnung genau so zu lassen, denn es liegt mir alles daran, die gedankengänge so herauszuschälen, dass die knappe, gedrängte form gewahrt wird. ich denke mir, dass sie selbst diese uebersetzung ins tschechische so gut wie eben möglich vornehmen werden, und ich danke ihnen hierfür im voraus bestens.“ (MEYER, Korrespondenz Hannes Meyer-Karel Teige, 29. Jan. 1929, Bauhaus-Archiv Berlin, Inv. Nr. 780656)
- (23) MEYER, „bauhaus und gesellschaft.“ in *bauhaus*. 3. Jahrgang, Nr. 1, 1929, S. 2.
- (23) „anlässlich ihres hierseins können sie dann nach ihrer freien wahl das material für die bauhausnummer der zeitschrift “RED” selbst aussuchen.“ (MEYER, Korrespondenz Hannes Meyer-Karel Teige, 14. März 1929, Bauhaus-Archiv, Inv. Nr. 780656)
- (27) MEYER, Korrespondenz Hannes Meyer-Karel Teige, 11. Juli 1929, Bauhaus-Archiv, Inv. Nr. 780656.
- (23) „aus ihrem ausführlichen schreiben vom 3.9.29 habe ich entnommen, dass sie zunächst nicht ans bauhaus kommen werden, um ihren vortrag zu halten, und dass auch die geplante bauhausnummer in RED nicht so bald herauskommen wird, frühestens im november oder dezember ds. js. unter diesen umständen erübrigt sich wohl eine schriftliche auseinandersetzung über die von ihnen angeschnittenen fragen und es ist denkbar, dass wir uns in der zwischenzeit nochmals in prag treffen, da ich dort voraussichtlich diesen herbst zu tun habe. - sie erhalten in den nächsten tagen eine neue druckschrift des bauhauses, die ich als provisorischen prospekt zusammengestellt habe, darin werden sie auch einige arbeiten finden, die ihrer bauhaus publikation sehr wohl anstehen würden. es ist sehr schade, dass sie ihren plan ans bauhaus zu kommen nicht verwirklicht haben, so muss ich versuchen, auf anderen wegen die brücke zur tschechoslowakei zu schlagen.“ (MEYER, Korrespondenz Hannes Meyer-Karel Teige, 5. Sept. 1929, Bauhaus-Archiv, Inv. Nr. 780656)
- (26) 1. 7. 1929 建築本館中心への制作時間のことについてDROSTE, Magdalena. *Bauhaus*. Köln: Taschen, 2019, S. 364. *や絵語った。*
- (27) „die leitung gibt bekannt: der tschechische schriftsteller karel teige, prag, ist von der bauhausleitung zu einem einwöchigen gaskurs für die zeit vom 20. bis 25. 1. 1930 ans bauhaus verpflichtet worden mit dem auftrag, über „das europäische schrifttum der gegenwart, insbesondere über französische, tschechische, russische literatur“ zu sprechen, sowie – in der reklame – abteilung – die beziehungen

"zu neuem inhalt und neuer form"

"in der typografie"

daezulegen.

herr karel teige wird im februar 1930 in seiner zeitschrift "RED" (prag) ein sonderheft über die neuesten arbeiten des bauhauses herausbringen." (MEYER, Korrespondenz Hannes Meyer-Karel Teige, 18. Dez. 1929, Bauhaus-Archiv, Inv. Nr. 780656.)

- (28) 今の書簡は今のために日付を読み取るのが困難じゃあ。中には読み取りうる部分から判断して二十七日と仮定した。なお、書簡本文中には一九二九年十二月十四日の取り決めの確認がある旨が書かれており、またその後メイヤーは十二月三十日にもタイケに書簡を書いているため、本書簡は十二月十五日から十二月二十九日までの間に書かれたものであると考えられる。

- (29) Heller (独語) / haléf (チヤロ語) チヤロスロヴァキアの通貨コナナの補助通貨。100コナナ = 1コナナ。

- (30) „hierdurch bestätige ich unsere absprache vom 14. 12. 29. hinsichtlich der herausgabe einer bauhaus-sonder-nummer ihrer zeitschrift wie folgt:

reserviert wird die februar-nummer 1930. das letzte material muss spätestens bis 20. januar 1930. in ihrer hand sein. ein teil des textes und der abbildungen geht ihnen schon in diesem monat zu. die redaktion besorgen sie unter beratung durch den unterzeichneten.

ihre normal-auflage beträgt 1400 example. wir sind bereit, weitere 1000 example zu übernehmen, gegen eine sonderentschädigung, welche sie uns demnächst mitteilen wollen. diese 1000 example verteilen wir wie folgt:

500 stück = "kreis der freunde des bauhauses"

200 stück = bauhaus angehörige

300 stück = zur verteilung an interessen und besucher.

der umfang des normal-heftes beträgt 32 seiten plus umschlag, davon sind: 2 seiten insertion

16 seiten kunstdruckpapier (für autotypie) und

16 seiten matt-papier (für text und schwarz-weiss-klischees)

der umschlag evtl. zweifarbig.

die klischeekosten übernimmt der verleger; sie betragen:

für schwarz-weiss-klischee à 40 heller pro qcm (ca. 5 pfennig)

für autotype à 50 heller pro qcm (ca. 7 pfennig).

- inzwischen hat uns herr w. peterhans bereits einen aufsatz (gut) und fotografien für sie zur verfügung gestellt, dazu kommt ein unveröffentlichter aufsatz der ihnen bekannten frl. otti berger über weberei:--über alles übrige später." (MEYER, Korrespondenz Hannes Meyer-Karel Teige, 27 (?), Dez. 1929, Bauhaus-Archiv, Inv. Nr. 780656.)

- (15) „mit allem einverstanden! das material kann anlässlich ihres hiersseins endgültig zusammengestellt werden. einen teil davon schicke ich, wenn möglich, schon in den nächsten tagen." (MEYER, Hannes, Korrespondenz Hannes Meyer-Karel Teige 6. Jan. 1930, Bauhaus-Archiv, Inv. Nr. 780651.)

- (22) MEYER, Korrespondenz Hannes Meyer-Karel Teige, 6. Feb. 1930, Bauhaus-Archiv, Inv. Nr. 780651.

- (23) MEYER, Korrespondenz Hannes Meyer-Karel Teige, 14. Feb. 1930, Bauhaus-Archiv, Inv. Nr. 780651.

- (24) MEYER, Korrespondenz Hannes Meyer-Karel Teige, 24. März 1930, Bauhaus-Archiv, Inv. Nr. 780651.

- (25) SOUPAULT, Philippe, «Do Praty» *ReD*, 1. Ročník, Číslo 1, 1927, s. 3-4.

- (26) NEZVAL, Vítězslav, „Gedichte (Deutsch von Ferdinand Barták)“, *ReD*, 2. Ročník, Číslo 8, s. 263.

- (72) MARINETTI, Filippo Tommaso, «Poema preciso» / «macchine lirique.» *ReD*, 2. Ročník, Číslo 6, s. 175.
- (73) „F. T. Marinetti +italská moderna +světový futurismus.“ *ReD*, 2. Ročník, Číslo 6, s. 185-204.
- (74) „1) text: sie hatten bis jetzt nur den aufsatz über weberlei v. otti berger.
sie bekommen anbei den aufsatz "zum gegenwärtigen stand der fotografie" von peterhans, es erschiene mir wünschenswert im interesse des kreises der freunde des bauhauses, wenn dieser aufsatz deutsch erscheinen könnte.
der studierendenvertreter albert mentzel hielt während der bauhauswoche einen vortrag "über den bauhäusler, auf meine veranlassung arbeitet er denselben noch konzentrierter um und ich halte den aufsatz für geeignet zum abdruck in RED, da er eine ähnliche gegenüberstellung enthält wie ihr aufsatz, den sie in dessau verfassten. so könnte meines erachtens der aufsatz mentzel in deutscher sprache und der ihrige in tschechischer sprache gedruckt werden oder umgekehrt. für die mitglieder des kreises halte ich es für zweckmässig, wenn sie die ansicht eines studierenden mal hören würden.
als weiteren text-beitrag hatten sie die absicht, meinen aufsatz "bauhaus und gesellschaft" ins tschechnische zu übersetzen, was ich ihnen gern anheimstelle.
2) mitteilungen: frage: können wir einige mitteilungen, bestimmt für den kreis der freunde im nachrichten-teil einfügen? ebenso wären wünschenswert die letzten manifestationen des instituts (ausstellungen, vorträge usw.) im nachrichten-teil zu erwähnen.
beides ist jedoch nur eine bitte, und nicht unbedingt erforderlich.
3) bildbeitragen: ich bin eben bei der letzten sichtung des materials und sie erhalten morgen eine erste sendung zur klichierung, der rest folgt innert zwei tagen.
4) frage: muss ein entwurf für den umschlag hierseits gemacht werden oder besorgen sie das doch persönlich?
mit den besten grüssen
ihr hannes meyer
anlage: aufsatz peterhans" (MEYER, Korrespondenz Hannes Meyer-Karel Teige, 6. Feb. 1930, Bauhaus-Archiv, Inv. Nr. 780651.)
- (75) „poznámka redakce: pro toto číslo, věnované dessavské vysoké škole pro moderní tvorbu „bauhaus“ bylo připraveno více obrazového a textového materiálu, než bylo možno umístiti na daných 32 stránkách, nedostatek místa donutil nás odložití do některého z příštích čísel několik fotografií w. peterhase, fritze kurrta, fotografie nabytku alfreda arnolda, kresby paula kleea a l. feiningera, architektonické projekty l. hilbersheimera a j.; rovněž pro nedostatek místa nebylo možno připojit k článkům tohoto čísla, jež jsou původními, pro red psanými příspěvky, české překlady, přineseme je však dodatečně v příštích číslech, všechna vyobrazení tohoto čísla (kromě pěti) nebyla dosud nikde uveřejněna, práva reprodukcí a překladu původních příspěvků jsou redu a bauhausu vyhrazena.“ („poznámka redakce“, *ReD*, 3. Ročník, Číslo 5, 1930, s. 160)
- (76) „wollen sie mir auch die definitiven bedingungen für die 1000 stück bauhaus-exemplare bekanntgeben, damit ich im "kreis der freunde" das geld bereitstelle-
ein spezialumschlag für den kreis der freunde ist nich notwendig, ich denke, wir übersenden ihnen das adressen-material und die expedition geschieht von prag aus, oder ist ihnen lieber, wenn wir das von dessau aus selbst besorgen?“ (MEYER, Korrespondenz Hannes Meyer-Karel Teige, 14. Feb. 1930, Bauhaus-Archiv, Inv. Nr. 780651.)

- (42) „kreis der freunde des bauhauses.“ *bauhaus*, 3. jahrgang, Nr. 2, 1929, S.27.
- (43) *Ibid.*
- (44) MEYER, „bauhaus und gesellschaft.“ *bauhaus*, 3. jahrgang, Nr. 1, 1929, S.2.
- (45) ROTHENBACHER, Franz, *The European Population 1850-1945*, London: Palgrave Macmillan, 2002, p. 145.
- (46) SCHLEMMER, Oskar (SCHLEMMER, T ut, Hg.), *Briefe und Tagebücher*, Stuttgart: Verlag Gerd Hatje, 1977, S. 91. 「シュタインハンの「表現」の表現はスイスのシュタインハンの存在する、神秘思想家ルドルフ・シュタインナー (Rudolf Steiner, 1861-1925) が設計したゲーテアナム (Goetheanum) を念頭においた、過度な美学性を批判した発言と推測される。
- (47) 富田英夫「ハインス・メイヤー主導のバウハウスにおける分析重視のデザイン教育」九州産業大学建築都市工学部研究報告第一号「二〇一八年」一頁。
- (48) DROSTE, *Bauhaus*, S. 367-370.
- (49) *Ibid.*, S. 375.
- (50) *Ibid.*, S. 389.
- (51) *Ibid.*, S. 383.
- (52) 利光「前掲書」一六〇頁。
- (53) DROSTE, „Unterrichtsstruktur und Werkstattarbeit am Bauhaus unter Hannes Meyer.“ in KLEINERÜSCHKAMP (Hg.), *Op. cit.*, S. 154.
- (54) „die ästhetischen möglichkeiten der industrie- technic und ihrer besonderen werkstoffe sind blendend, doch luxuriös, das bauhaus aber hat nicht dem luxus, einerteil ob handwerklicher oder maschineller art, sondern den bedürfnissen der breitesten volksgemeinschaft zu dienen.“ (KÁLLAI, Ernő, „zur einföhrung.“ *das bauhaus dessau, ausstellung gewerbemuseum basel (Katalog)*, 1929, in

- FLIERL, OSWALT (Hg.), *Op. cit.*, S. 60)
- (55) MEYER, „Mein Hinauswurf aus dem Bauhaus.“ *Das Tagebuch*, Heft 33, 1930, S. 1308.
- (56) „Dieses Ziel aber kann man nicht richtiger bezeichnen als mit der Formel: »Überwindung des Stils«. Nur drastischer noch kann man es sagen: das Ziel ist die »Stillosigkeit! [...] etwas zu einfach und zu gradlinig ist gegenüber der Wirklichkeit, die sich Bauhaus nennt“ (SCHMIDT, Georg, „Zur Einföhrung“, *Wegleitungen des Kunstgewerbemuseums der Stadt Zürich 94a: Bauhaus-Wanderschau 1930 (Katalog)*, 1930, in FLIERL, OSWALT (Hg.), *Op. cit.*, S.90)
- (57) TELGE, Karel, „Deset let Bauhaus“, *Stavba* 8, Ročník, Číslo 10, 1930, s. 146-152.
- (58) MENTZEL, Albert, „vom baubäusler zum studierenden.“ *Red*, 3, Ročník, Číslo 5, 1930, s. 158-160.
- (59) DROSTE, „Unterrichtsstruktur und Werkstattarbeit am Bauhaus unter Hannes Meyer.“ in KLEINERÜSCHKAMP (Hg.), *Op. cit.*, S. 153.
- (60) „wir untersuchen die beziehungen im stoff zwischen farbe und material, zwischen farbe und struktur, und wir sehen, daß die möglichkeiten, mit diesen mitteln zum stoff zu kommen, unbegrenzt sind.“ (BERGER, Otti, „stoffe im raum.“ *Red*, 3, Ročník, Číslo 5, 1930, s. 143)
- (61) DROSTE, *Op. cit.*, S. 386.
- (62) „kunst im herkömmlichen und gestaltung im neuen sinne, das gibt es nicht. Denn das „herkömmliche“ ist nie kunst [...] man muß nicht unbedingt bilder malen, um ein künstler zu sein. [...] um ein künstler zu werden, muß ein künstler sein, und um es zu werden, wenn man es schon ist, dazu kommt man an das bauhaus; und aus diesem „künstler“ wieder einen menschen zu machen: das ist die aufgabe des bauhauses.“ (BERGER, „interview mit baubäuslern.“ *bauhaus*, 2

- Jahrgang, Heft 2/3, 1928, S. 25.)
- (32) MEYER, „bauhaus unnd gesellschaft.“ *bauhaus*, 3. Jahrgang, Nummer 1, 1929, S. 2.
- (33) MEYER, Korrespondenz Hannes Meyer-Karel Teige, 18. Dez. 1929, Bauhaus-Archiv, Inv. Nr. 780656.
- (34) „Unsere Wohnung wird mobiler denn je: Massenmiethaus, Sleeping-car, Wohnjacht und Transatlantique untergraben den Lokalbegriff der Heimat. Das Vaterland verfällt. Wir lernen Esperanto. Wir werden Weltbürger.“ (MEYER, „Die neue Welt.“ *Das Werk*, Band 13, Heft 7, 1926, S. 221)
- (35) „140 sind deutscher herkunft
8 sind aus anhalt
78 sin aus preußen
26 sind aus sachsen
28 sind aus dem übrigen deutschland
30 sind ausländer und zwar:
8 schweizer
4 polen
3 tschechen
3 russen
2 amerikaner
2 letten
2 ungarinnen
1 deutsch-österreicher
1 holländerin
1 türke
1 perserin
1 palästinenser
1 staatenloser
[...]" („unsere bauhäuser.“ *junge menschen, kommt ans bauhaus!*, 1929,
- in FLIERL, OSWALT (Hg.), *Op. cit.*, S. 48.)
- (36) „Dnes studuje tu již na 200 žáků z nejrozmanitějších zemí [...] Bauhaus usiluje o získání co největšího počtu zahraničních studentů. Dnes tvořítu třetinu studentstva cizinci (a mezi nimi je 7 Čechoslováků) takže Bauhaus je hotový Babylon a Kosmopolis.“ (TEIGE, *Op. cit.*, s. 152.)
- (38) DIETZSCH, Folke, „Die Studierenden am Bauhaus -Statisches,“ *Bauhaus Kolloquium: Wissenschaftliche Beiträge zur Geschichte des Bauhauses*, 35. Jahrgang, Heft 2, Weimar: Sektion Architektur der Hochschule für Architektur und Bauwesen Weimar, 1989, S. 89-92.
- (69) *Ibid.*, S. 90.
- (70) *Ibid.*, S. 91.
- (71) SVOBODOVÁ, Markéta, *bauhaus a československo 1919-1938 (the bauhaus and czechoslovakia 1919-1938)*, Praha: KANT, 2016.
- (72) Oskar Zaborsky, Jindřich (Heinrich) Koch, Lisbeth Oestreichová, Josef Hausenblas, Antonín Urban, Václav Zralý, Vladimír Němeček, Ladislav Foltyrn, Josef Pohl, Mathylde Wienerová, Marie Rossmannová Doleželová, Zdeněk Rossmann, Irena Blüthová, Edith Rindlerová, Inge Stipanitzová, Alois Rudolf Watznauer, Bohumila Rolčíková, Augustin Lacko, Otakar Fritka.
- (73) 土肥ツツ子 Koch, Oestreichová, Hausenblas, Urban, Zralý, Němeček, Foltyrn, Pohl, Wienerová, Rossmannová Doleželová, Rossmann.
- (74) トイヤー校長時代に最後に刊行された『バウハウス』である。
- (75) フレーク (Prag) はフランスのドイツ語名である。フランクはPrager Tagblattがドイツ語新聞である点を考慮して「フランク日報」を表記した。フランク新聞 (Prager Presse) も同様である。
- (76) „In seiner 2 $\frac{1}{2}$ -jährigen Amtszeit, in der sich das Bauhaus trotz schwieriger Verhältnisse sehr günstig entwickelte, hat er auch die verschiedensten Beziehungen zur Tschechoslowakei angeknüpft. In der stets zunehmenden Zahl tschechoslowakischer Studierender am

Bauhaus (deutscher wie tschechoslowakischer Nationalität) kommt das besonders zum Ausdruck." („Schiedsgericht über Hannes Meyer," *Prager Tageblatt*, 3. Aug. 1930, S. 5)

- (7) „Leitungswechsel im Bauhaus Dessau," *Prager Presse*, 3. Aug. 1930, S. 10.

- (8) „Za jeho dvaapůlletého vedení Bauhausu, v kteréžto době se Bauhaus přes nepříznivé poměry skvěle vzvíjel, navázal různé spojení i s Československem (na př. jmenování Karla Teigeho docentem Bauhausu), tak že počet českých studujících na Bauhausu se značně zvýšil. [...] Pro československo obchod Hannes Meyera z Bauhausu znamená ztrátu, neboť v něm ztrácíme na tomto umělecky exponovaném místě velkého přítele a nadšence, který "přisahal na Československo" a svoji víru v krásnou budoucnost našeho národa všude akcentoval." („Změna ve vedení v desavském „Bauhausu," *Československá republika*, 8. srpna 1930, s. 5)

- (9) WINKLER, *Op cit.*, S. 143-144

- (10) *Ibid.*, S. 158-160.

- (11) SVOBODOVÁ, *Op cit.*, s. 84.